

飛鳥・藤原宮跡の調査

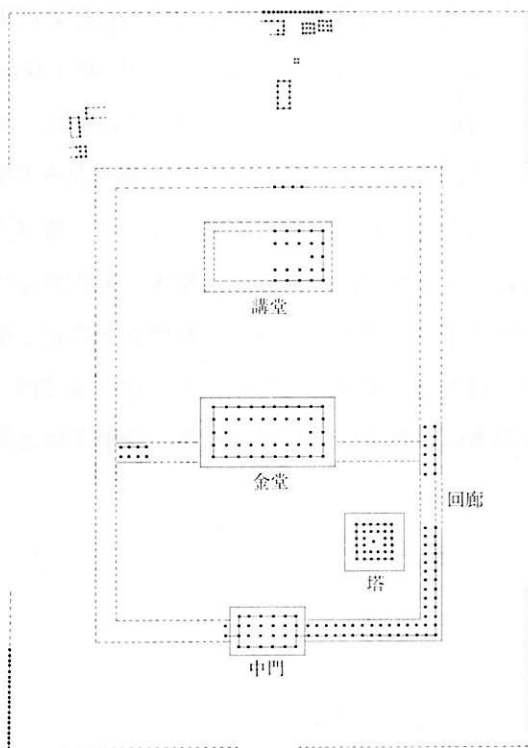
飛鳥・藤原宮跡発掘調査部

飛鳥・藤原宮跡発掘調査部は1980年度において、飛鳥地域で大官大寺、檜隈寺、坂田寺などの寺院遺跡を中心に11件、藤原宮・京城では東面大垣・東方官衙・南面大垣、左京九・十條三坊など24件、あわせて35件におよぶ発掘調査を実施した。以下に主要な調査の概要を報告する。

1. 飛鳥諸寺の調査

大官大寺北辺(第7次)の調査 本年度の調査は、寺域北限と北辺地域の状況を知ることが目的に、伽藍中軸線上で、講堂の北方60m～130mの地点において実施した。調査の結果、掘立柱塼、掘立柱建物、井戸、土壌などを検出した。また、寺造営以前などの遺構も検出している。

掘立柱の東西塼 S A 600は、総長約24m、13間分を検出した。東西は発掘区外へ延びている。柱間は約1.8m等間である。中軸線上では門の存在を予想したが、発見されなかった。この塼は講堂の心から北へ約105mの位置にある。塼の南4mにある掘立柱の南廂付東西棟建物 S B 595は、桁行3間分を検出したが、西は発掘区外へ延びる。東妻は中軸線から東へ約3.5m離れている。柱間は桁行の東端間が2.54m、他の2間は2.21m等間で、梁行は身舎2.22m、廂は1.72mである。この建物から東へそれぞれ約9.2m、17.2m離れて、2棟の掘立柱の総柱建物 S B 591と S B 590を検出した。S B 590は北側柱筋を S B 595 にそろえる。桁行3間で柱間は中央が1.68m、脇が1.48m、梁行2間は1.92m等間である。S B 591も規模はほぼ同様で、桁行3間の柱間が中央1.60m、脇が1.53mだが、梁行2間の柱間は、南が1.98m、北は1.73mと異なる。また北側柱筋も S B 595と S B 590のそれを結んだ線より約1.4m南にある。これらの建物群とは別に、南へ約20m離れて、掘立柱の南北棟建物 S B 570を検出した。これは桁行5間・梁行2間の規模で、柱掘形中には柱根や柱痕跡があった。柱間の平均は桁行が2.31m、梁行は2.60mである。井戸 S E 580は S B 595と S B 570との中間、やや南寄りで見出した。掘形は直径3.5mほどある。井戸枠は抜取られていた。



大官大寺伽藍復原図

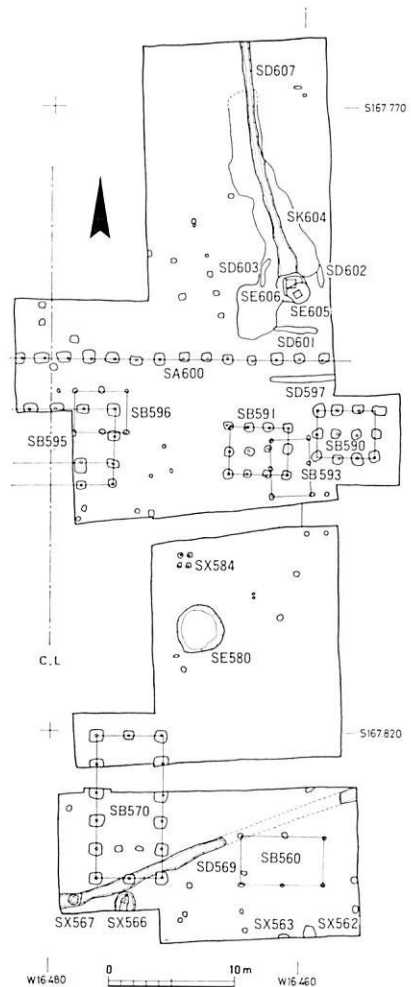
寺造営前の主な遺構には、井戸と溝がある。井戸 S E 605・S E 606 は重複していて、S E 606 が古い。S E 605 には内法の一辺 0.525m の井籠組の井戸枠が残存していた。斜行溝 S D 607 は素掘りで、南から北へ流れる。南端は S E 606 へ接続しており、井戸の排水用溝とみられる。その他、平安時代頃と考えられる遺構として、掘立柱建物 S B 560, S B 593, S B 596 を検出している。また、発掘区南端では、花崗岩製の礎石を落し込んだ穴 S X 566, S X 567 を発見しているが、これは南接する未発掘地に礎石建物の存在を予想させるものである。

出土遺物には瓦、土器、木製品、金属製品がある。今回の調査区では、瓦の出土量が極めて少ないのが注目される。S E 580 井戸枠抜き穴の埋土から出土した単弁 8 弁蓮華文樋先瓦の例は、膳夫寺(奈良県橿原市)出土と伝える単弁 8 弁の軒丸瓦と同型である。木製品には小刀状のもの、金属製品には鉄釘がある。

今回の調査によって寺域北限が判明し、北辺部の状況の一端も明らかになった。すなわち、北限を画する施設は掘立柱塀であり、その南の総柱建物を含む建物群の地域は、雑舎的性格のものが多い部分とみられるのである。寺域については、現在までの調査成果から、南は第 2 次調査の南門推定地、東は第 3 次調査の S X 240、西は小山池内の調査で検出した塀 S A 2700 が、それぞれの限と推定されている。これらと北限とをともに寺域を复原すると、南北 3 町、東西 2 町の広さとなる。またその位置は、藤原京条坊に合致した形で、東西は東三・四坊大路、南北は十条大路と九条条間路に囲まれた範囲にあると考えられる。なお、北限の塀と九条条間路推定心、および西限の塀と東三坊大路推定心とは、それぞれ 29m, 24.5m 程離れており、道路との間には堀地が存在することになる。今後の調査で確認する必要がある。

檜隈寺第 2 次調査 この調査は、飛鳥地域における寺院調査の一環として実施したものである。本年度の第 2 次調査では、推定中門の土壇状の高まりとその周辺部を発掘し、金堂と推定される礎石建物を発見した。

礎石建物 S B 300 は、桁行 3 間、梁行 2 間の身舎に四面廂が付く、正面 5 間、奥行 4 間の建物である。柱間は、身舎の桁行が 2.72m の 9 尺で、梁行は 2.81m の 9.3 尺、廂の出は 2.88m で 9.5 尺、いずれも等間である。全体の大きさは、桁行 13.92m の 46 尺、梁行は 11.38m

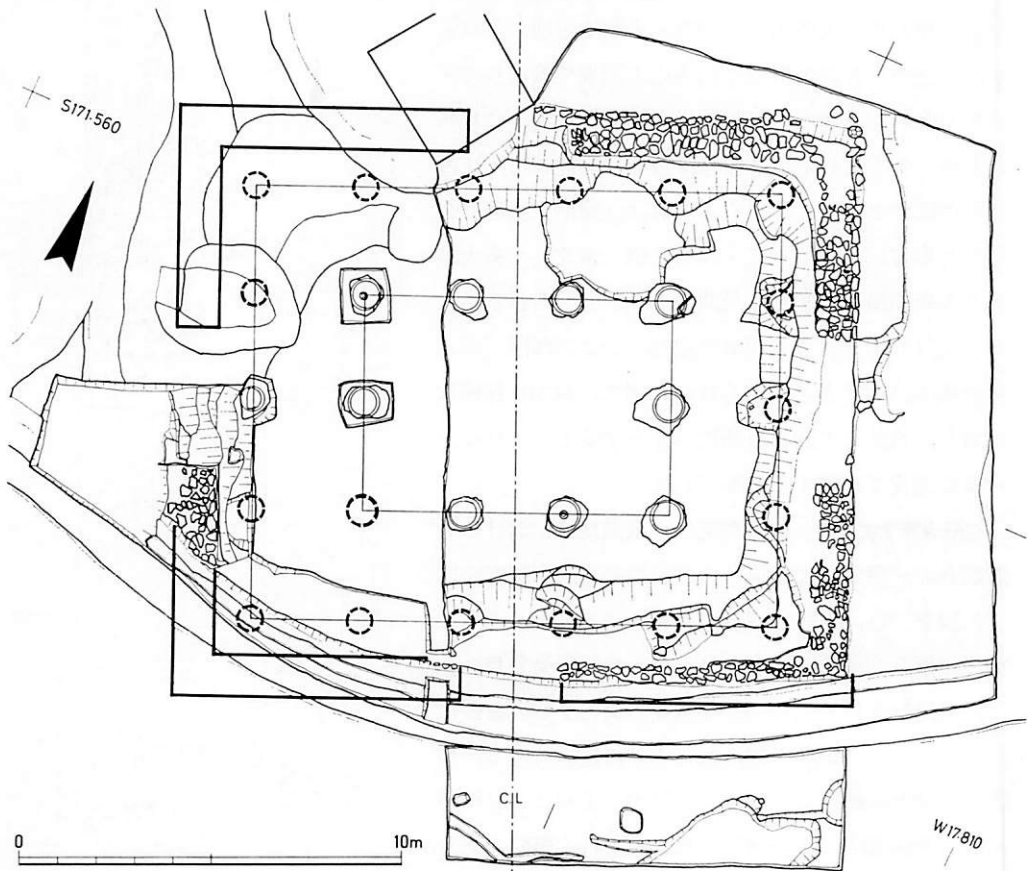


大官大寺第 7 次調査遺構図

の37.6尺となる。礎石はすべて花崗岩製で、円形の柱座が造り出されている。柱座径は身舎柱が0.75m～0.80m、廂柱は0.7mある。

基壇は四面に階段の取りつく二重基壇であったと推定される。下成基壇は、上面に花崗岩を主体とした人頭大の扁平な河原石を、約1.1mの幅に敷き並べたもので、外周には縁石をめぐるしている。上成基壇については、凝灰岩や瓦を使用した痕跡は認められず、あるいは玉石積基壇であったかもしれない。規模は、下成基壇が外縁で東西17.95mの約59尺、南北は15.5mの約51尺、上成基壇はその基壇端を下成基壇外縁の内側0.8mの位置に想定すると、東西が16.35mの約54尺、南北は13.9mの46尺となる。総高は1.3mで、うち上成部高1.15m、下成部高は0.15mである。

基壇築成は、地山を削り出したのち、その上に版築を行う方法をとっている。礎石は築成の途中で据え付ける。下成基壇は先に築成した基壇の周囲を削り込み、整形して作る。階段は、下成基壇を整形する際に、削り残して作っている。ここには下成基壇面の敷石が無く、その幅は南北両辺で2.73m、東西では3.75mである。通例では、階段幅は基壇辺長に比例しているが、ここでは正面と背面の幅の方が狭い。側面は廂柱礎石の柱座が半円形であるところからみて、



檜隈寺第2次調査遺構図

あるいは東西辺には回廊などが取り付いていた可能性も考えられる。なお、基壇築成土中には、7世紀前半に属する須恵器・土師器片が含まれていた。

出土遺物には、瓦、土器、金属製品、玉類がある。瓦類としては、軒丸瓦、軒平瓦、榫先瓦、尾榫先瓦、鬼瓦および多量の丸・平瓦がある。SB300の周辺からは、外縁に幅線文を配する複弁8弁蓮華文軒丸瓦、3重弧文軒平瓦、単弁8弁蓮華文と複弁8弁蓮華文の榫先瓦、複弁16弁蓮華文尾榫先瓦が多量に出土している。これらが出土軒瓦の8割以上を占めており、SB300の創建瓦と考えられる。その年代は7世紀後半頃である。

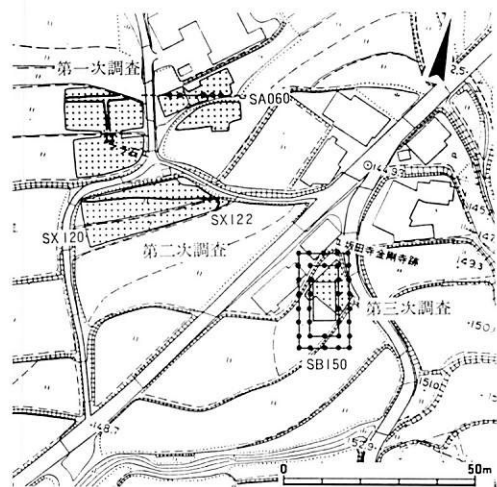
今回発掘調査した土壇は、従来の研究成果ではその位置や他の土壇との関係から、中門に比定されていたものである。しかし発掘の結果、これは正面5間、奥行4間の金堂と考えられる礎石建物基壇であることが確認できた。したがって伽藍配置は、今迄考えられていた法起寺式あるいは薬師寺式の形態ではない可能性が強く、再検討する必要がある。しかしながら、現在確認されている塔や東回廊等の位置関係を考慮しても、なお不明な点が多く、今後調査を継続して解明する必要がある。

坂田寺第3次調査 この調査は、明日香村営上水道加圧ポンプ場建設に伴う、事前調査として実施したものである。調査の結果、須弥壇を備えた礎石建物一棟を検出し、この地域が伽藍中樞部にあたることを確認した。

礎石建物SB150は、桁行7間、梁行4間に復原でき、桁行5間、梁行2間の身舎に四面廂が付くものと推定される。今回の調査では、東入側柱3間分と東側柱礎石、西入側柱礎石各1を検出した。基壇規模やその化粧については、基壇端が発掘区外にあるため、不明である。柱間は、身舎が3.86mの13尺等間、廂の出は2.68mの9尺で、復原総長は桁行24.7mの83尺、梁行は13.1mの44尺となる。礎石はいずれも花崗岩製で、円形の柱座が造り出されている。柱座の直径は、入側柱0.66m～0.71m、側柱は0.58mである。

SB150身舎中央3間分で須弥壇を検出した。東側を除いて、凝灰岩の切石による基壇化粧が施されている。切石には、地覆・羽目・葛を示す加工があり、さらに一石間隔に東が表現されている。また羽目には花頭曲線の格狭間を浮彫りにしている。東面は壇化粧の痕跡がなく、壁受の横木が残存していた。したがって、この部分が須弥壇背面に相当し、建物は西面していたことになる。なお、須弥壇および建物基壇上面は本来舗装のない土間床と推定される。

基壇および須弥壇の築成方法は、基壇と須



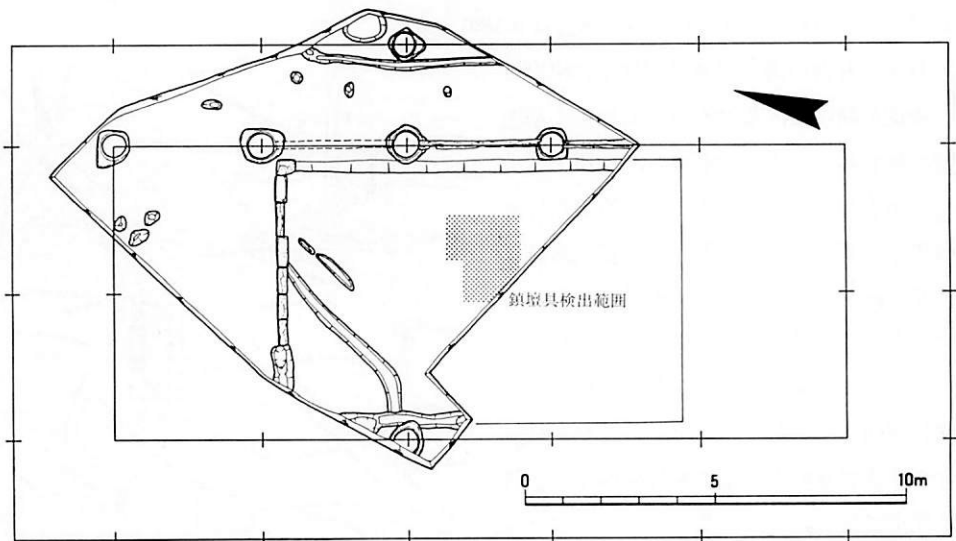
調査位置図

須弥壇の築成が連続した手順で行なわれたことが判明した。建物基壇積土を掘り込んで礎石を据え付け、同時に須弥壇の掘り込み地業を行う。その後、建物基壇全面にわたって黄褐色粘土を敷きつめる。須弥壇鎮壇具はこの工程に併行して埋納され、その後、須弥壇を版築により築成する。建物基壇積土や須弥壇掘り込み地業土・版築土は、礫や瓦片を含む。

須弥壇における鎮壇具の探索では、10種40点におよぶ埋納品を検出した。最奥部に瑞雲双鸞八花鏡1面、その周囲に金箔、心葉形水晶玉1点、琥珀玉2点、銅銭28点(和同開珎2, 万年通寶3, 神功開寶11, 不明12)、刀子1点、金銅製挟子1組を配する。また鏡の直下には瑠璃玉2個が置かれていた。さらに鏡から約40cm西寄りの地点に、灰釉小形双耳瓶がある。絹布片も2ヶ所を確認している。鎮壇具の年代は、8世紀後半と推定される。鎮壇具のほか、主に基壇および須弥壇上面の焼土層から銅釘、土師器、脱活乾漆像の断片、和同開珎銀銭が出土した。土師器は10世紀後半頃のものである。これら遺物の年代から、S B 150は8世紀後半に造営され、10世紀後半に焼失したことが判明する。

S B 150は、須弥壇があることや平面規模からみて、金堂ないし講堂に比定でき、伽藍配置の復原に重要な手掛りを与えた。すなわち、S B 150は西面しており、建物の主軸方位は北で西へ約15度偏するが、付近にはほぼ同方位の地割りが残存していること。また先年この建物の北西で2次にわたる発掘調査によって検出した、石組溝、柱列、石垣、池等の遺構の方位が、S B 150とほぼ同様である点からみて、伽藍は西面し、主要堂塔は一直線上に並ぶ可能性が高いのである。

豊浦寺の調査 向原寺薬師堂(天保5年建立)の解体移築工事に伴う事前調査として実施したものである。向原寺境内は1957年奈良県教育委員会によって部分的に発掘調査が実施されて、その際中世頃と推定される5間×4間の礎石建物が確認された。今回の調査対象地は、その時確



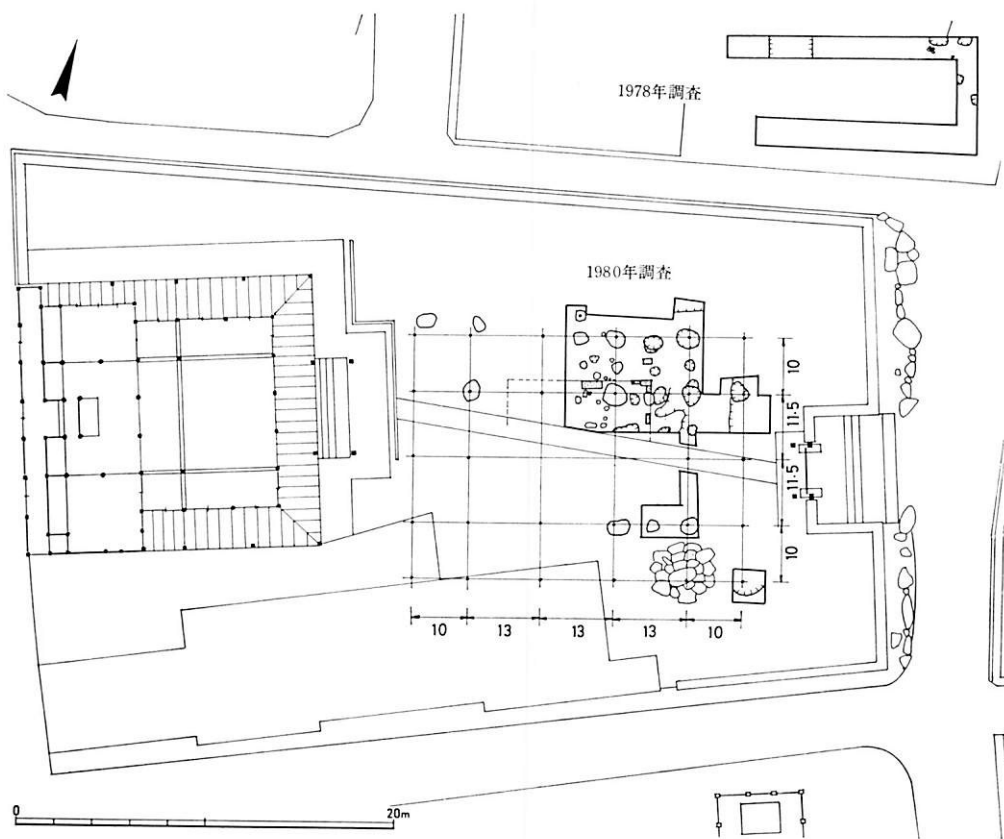
坂田寺第3次調査遺構図

認された建物の一部にあたるが、薬師堂が存在して当時は調査できなかった場所である。

調査の結果、桁行5間、梁行4間の礎石建物を確認した。柱間寸法は、身舎桁行13尺等間、梁行11.5尺等間、廂10尺に復原できる。身舎中央部に造り付け仏壇の地覆石と見られる凝灰岩切石が存在している。また礎石間には、床束石と推定される小形の礎石がある。建物は南面するが、軸線は真北に対し北で約18度西偏する。基壇は版築によって造られている。建物の建立年代は、出土瓦の年代観や建物が床張りであること、仏壇地覆石が転用材であること等から、鎌倉時代初期頃に比定できる。また建物は焼失しており、その年代は室町時代後半頃である。

なお基壇たち割りによって、この建物基壇に重複し、さらに一時期古い基壇版築層が存在したことを確認した。この基壇も火災を被っている。築造年代については不明である。

今回の調査では、都合三時期の遺構を確認した。最上層に位置する薬師堂に伴う亀腹風の基壇、中世創建の5間×4間の礎石建物・基壇、および最下層で検出した中世以前の基壇である。すなわち、現向原寺薬師堂は、中世の建物の上に建立されていたこと、また同じ場所に中世以前の前身建物が存在したことが判明した。

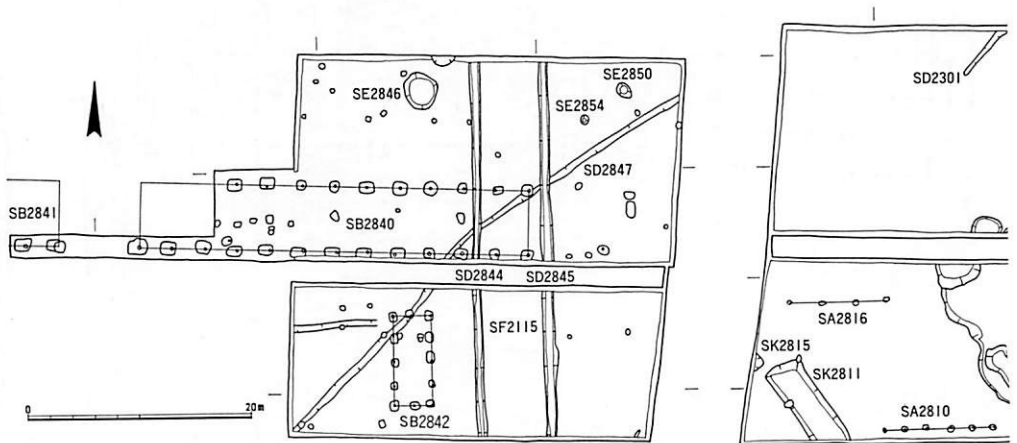


豊浦寺調査遺構図

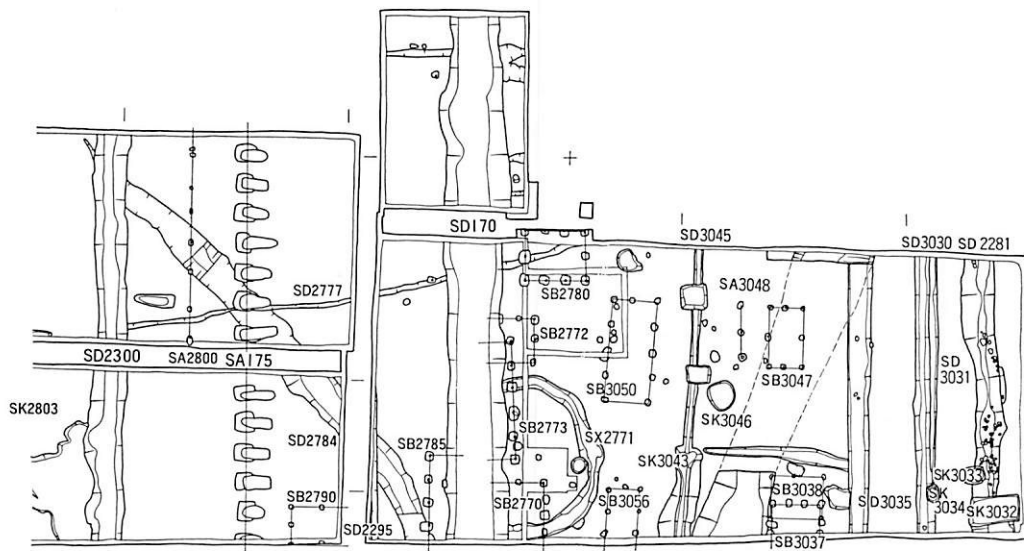
2. 藤原宮跡・藤原京跡の調査

藤原宮東面大垣・東方官衙(第29・30・32次)の調査 1978年度以来、第24次・27次の二次にわたる調査で宮東面大垣とそれに開く宮城門(東面北門)、内濠、外濠などを検出し、この近辺の様相はかなり判明してきている。今年度は宮東限の諸施設を更に広範囲に明らかにするとともに、これまでに必ずしも十分に解明できていない東面大垣西方地域および外濠東方地域の状況についての知見を得るために29・30・32の三次にわたり、東西約180mの範囲について発掘調査を実施したものである。

検出した遺構の時代は古墳時代前期、7世紀、藤原宮期直前、藤原宮期、藤原宮期以降の5期に大別される。藤原宮期の遺構には東面大垣S A 175、内濠S D 2300、外濠S D 170、土塋S K 2801、S K 2803、掘立柱建物S B 2840、S B 2841、井戸S E 2846、南北溝S D 2295、S D 2281、S D 3031がある。東面大垣S A 175は南北14間分を検出した。柱間は2.66m(9尺)等間で、柱はいずれも東側に抜き取られている。外濠S D 170は幅4.5~6.0m、深さ1.2mの素掘り溝で、大垣と溝心との距離は約20mある。溝内からは1439点にのぼる木簡をはじめ、人形・削り掛け等の木製品、土器、瓦類が出土した。瓦は数量的に乏しく、軒瓦はわずかに4点にすぎない。内濠S D 2300は幅2.5~3.0m、深さ0.7mの素掘り溝で、溝心は大垣から西に約12.0m離れた位置にある。溝内からは木簡69点、土器、瓦のほか鳥の側面形をかたどった板の片面に羽毛を墨線で表現した木製品が出土している。南北溝S D 2295は幅0.6m、深さ0.3mの細い素掘り溝で、大垣から11.5m東にあり、前2回の調査で検出した溝と一連のもので、宮の四周を廻る溝と考えられる。土塋S K 2801は内濠の東岸にあり、東西3.6m、南北1.6mの不整長円形を呈する。埋土から木簡43点、土器片が出土した。土塋S K 2803は内濠の西岸に接して東西約12mの範囲



に広がる不整形の浅い土壌群である。埋土には瓦、土器が混在し、土馬が1点出土している。上面には炭化物を含む層が全面に広がり内濠埋土の上面に及んでいる。第30次調査区で検出した掘立柱建物 S B 2840は桁行12間(総長 35.2 m)、梁行 2 間の長大な東西棟で、柱間寸法は桁行、梁行とも 2.93m (10尺)等間である。この建物の東妻と東面大垣との距離は60.9mある。S B 2841は S B 2840に柱列を揃えた東西棟と考えられ、S B 2840から7.3m西に離れた位置にある。この 2 棟の建物の方位は方眼北に対して東に $1^{\circ}56'57''$ 偏しており、西に偏する宮造営方位とは逆の傾向を示している。井戸 S E 2846は S B 2840の北 9 mにある。井戸枠は抜き取られており、直径 2.5m、深さ 0.7mの平面円形の土壌状を呈している。第32次調査区の東端付近に流れる 2 条の南北溝 S D 2281、S D 3031 はいずれも藤原宮期に存在していたと考えられる。東側の S D 2281は東面大垣の東約66.5mにあり、幅 3 m前後、深さ0.6mのわずかに蛇行する素掘り溝であるが、溝底には人頭大の河原石が部分的に集積しており、本来石積みの護岸施設が施されていたことをうかがわせる。この溝は埋土に含まれる土器から10世紀代まで存続していたことがわかる。S D 3031は東面大垣から東に約61mの距離にあり、幅 1.5m、深さ 0.45mの素掘り溝である。この 2 条の溝は宮の東で南北に通じる東二坊大路の西側溝の想定位置付近にある。従来の調査の知見によると、東面大垣から東二坊大路心までの距離は令大尺200尺(約 71.2m、1尺 \approx 35.59 cm)とされている。そうとすれば S D 2281を西側溝とした場合、想定される東側溝との中心距離は約9.4mとなり、S D 3031では同様に大路幅員は約20.4mに復原される。宮の四周の大路については、これまで宮南面の六条大路の幅が部分的にはあるが確認されており、第21—2次調査で側溝心々19.8m、第 29—6・7次調査で 17.3m乃至 20.8mという数値が得られている。これに従えば、S D 3031が東二坊大路西側溝である可能性が強いと言えるが、S D 2281の評価を



藤原宮 29・30・32次調査遺構図

も含めて最終的判断は現在進捗しつつある出土遺物等の整理、分析の結果をまたねばならない。

以上のように三次にわたる調査により、藤原宮の東面外郭が大垣と内濠、外濠で構成されていた状況を再確認するとともに、大垣西方の宮内では第30次調査で検出した長大な東西棟建物 S B 2840 と大垣との間約60mほどは空閑地であった可能性が強いことを明らかにしえた。S B 2840の北側柱列は第21—1次調査で検出した四条条間路(計画線)から北約45.5mの位置にあり、先行条坊の坪の南3分の1に配置されている。また東妻が東二坊坊間路(計画線)上にあることから、先行条坊地割を規準として藤原宮の建物配置が行なわれたと考えられる。一方、外濠と東二坊大路との間の東西約36m幅の堀地部分にも藤原宮期の遺構はなく、大垣の東西には建物等の構築物の設けられない広大な空閑地が設定されていた状況が明らかになった。

藤原宮期直前の遺構には第30次調査区で検出した東二坊坊間路計画線 S F 2115とその西側溝 S D 2844、東側溝 S D 2845がある。道路幅員は側溝心々で6.25mあり、道路の方位は方眼北に対して西に38'41"偏している。西側溝 S D 2844は S B 2840との重複関係から、宮造営に際して埋め立てられたことがわかる。S F 2115路面心と東面大垣との距離は約62.9mである。掘立柱建物 S B 2842は桁行4間、梁行2間の南北棟で、東二坊坊間路 S F 2115の西4mにあり、建物方位が S F 2115と一致することから、同時期の遺構と考えられる。

7世紀に属する遺構は第32次調査区に集中している。この区域についてはまだ十分な整理・分析が完了していないが、遺構の方位が北でやや東に偏する南北溝 S D 3045、掘立柱建物 S B 3056、S B 3050および土壙 S K 0015、南北溝 S D 3045は出土遺物から7世紀第Ⅱ四半期に属す



東面大垣 S A 175 南から

ると判断される。また南北溝 S D 3035、掘立柱建物 S B 3037、S B 3038、S B 3047、S B 2770、S B 2772、S B 2773、S B 2780、S B 2785、南北堀 S A 3048、井戸 S E 3046、土壙 S K 3046は7世紀後半の遺構で、そのうち S D 3035、S B 3037からは7世紀第Ⅲ四半期の土器が、南北溝 S D 3030からは7世紀第Ⅳ四半期の土器が出土し、S K 3043からは大型の円面硯が出土している。古墳時代前期の遺物を含んでいた遺構には、第29次調査区の斜行溝 S D 2777、S D 2784、土壙 S K 2811、S K 2815、第30次調査区の井戸 S E 2854、S E 2850、第32次調査区の斜行大溝 S D 3040、円形溝 S X 2771などがある。この S X 2771は西半部を宮外濠で破壊されてはいるが、ほぼ平面正円形に復原することができ、埋土の状況からは流路であったことは考え難いことから、墳墓に関わる周溝ではな

いかと考えられる。

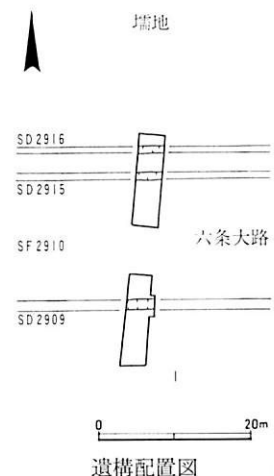
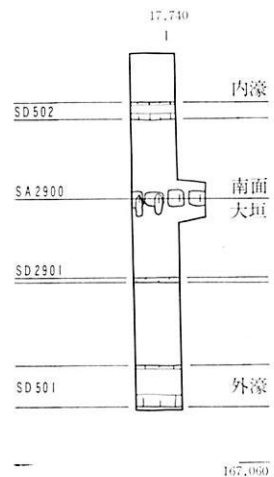
第32次調査区で検出した土壙 S K 3032, S K 3033, S K 3034, S K 3051, S K 3052は比較的浅いもので、埋土には鎌倉時代に属する瓦質土器が含まれる。湧水に乏しいことなどから井戸とは考えられないが、その性格は不明である。

藤原宮南面大垣・六条大路(第29-6・7次)の調査 この調査は藤原宮の南西部の飛弾町に計画された、体育館および隣保館等の建設に先立って実施したものである。調査地は南北3ヶ所に分れるが、宮南面大垣、内濠、外濠それに六条大路とその南北両側溝などを検出した。

東西堀 S A 2900は宮南面大垣で3間分ある。柱間寸法は2.66m(9尺)であり、東面あるいは北面大垣と一致する。内濠 S D 502は幅2.5m、深さ0.6mの素掘りの溝で、溝心と大垣との距離は約12.0mある。3層に分れる堆積土の最上層からは多量の瓦が出土した。外濠 S D 501は幅5.5m、深さ1.3mで、断面形が逆台形状を呈する素掘り溝である。溝心は大垣から南に約25.0m離れた位置にある。溝内堆積土からは土器、瓦の他、木簡6点、人形1点、犬・馬骨、スッポンの甲羅が出土した。木簡の中には大宝令あるいは浄御原令の篇名の一つである「考仕令」と記された断片があり注目される。東西溝 S D 2901は大垣の南約11.0mにある幅0.7m、深さ0.25mの浅い溝で、東面大垣東方にある S D 2295 および北面大垣北方の S D 144 と同じく、宮の四周をめぐる溝と考えられる。

宮の南面外郭については、第1次調査で南面中門と外濠・内濠が明らかになっている。南面中門心と内濠・外濠間の心々距離は各々11.5m、20.3mであり、今回の調査結果と比較すると、大垣・内濠間の距離がほぼ一致しているのに対し、大垣と外濠の間隔は今回の調査区で約4.5m 広がっていることがわかる。南面大垣と外濠間の距離が南面中門以西で徐々に広がっていくのか、あるいはその拡がり宮の南西隅に近い当地域だけの現象であるのかの解明は今後の調査に待たなければならない。

東西溝 S D 2909は幅1.6m、深さ1.2mの素掘り溝で六条大路南側溝と考えられる。北側溝についてはその想定位置付近に2条の東西溝 S D 2915, S D 2916を検出した。両溝とも幅0.8m 前後の素掘り溝で、埋土には藤原宮期の土器が含まれており、いずれとも判断がつきかねる。S D 2915・S D 2916と南側溝 S D 2909との心々距離は各々17.3m、20.8mとなる。六条大路については第21-2次調査によって側溝心々距離で19.8mの数値が得られている。これを考慮すれば、S D 2916を北側溝とすることもできるが、S D 2915, S D 2916の2条の溝の存在が六条大路 S F 2910幅員の拡大・縮小を示唆するもの

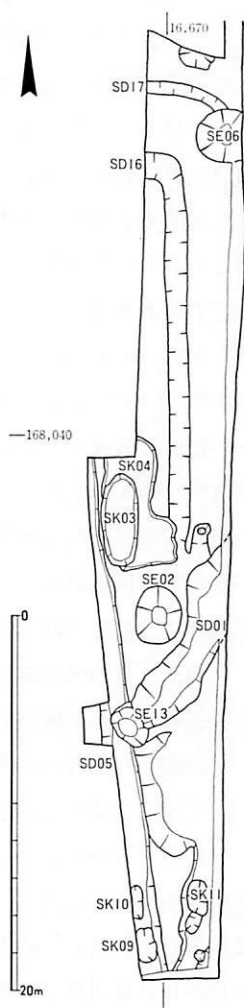


とみなすこともできるので、六条大路北側溝の確定は今後の問題としたい。仮に六条大路北側溝をSD2916とすると、大垣と六条大路間の心々距離は70.8m、SD2915とすると72.6mとなる。

藤原京右京五条三坊および西京極路(下ッ道)の調査 この調査は橿原市繩手町・小房町域における国道165号線バイパス建設に先立って実施したものである。東西350mの範囲の5ヶ所に調査区を設けて発掘したが、全体に数次にわたる飛鳥川の氾濫による堆積層が3mの厚さに及んでおり、所期の目的である藤原京西京極路の確認および右京の坪内状況の把握には至らなかった。しかし、Ⅱ～Ⅴ区では13世紀から14世紀後半に至る時期の水田遺構面とそれに伴う畦畔を検出し、氾濫と水田化の繰り返しの歴史を明らかにすることができた。とくにⅢ区において、犁による耕起の痕跡とみられる溝状遺構と、犁耕に使役されたと思われる牛のおびただしい足跡を精査したことは重要な成果である。

藤原京左京九条三坊・十条三坊(村道耳成線第1次)の調査 この調査は橿原市出合町から明日香村に至る村道の改良工事に先立って明日香村域で実施したものである。調査地は大官大寺想定寺域の西方約100mにあり、南半部は中世の山城の存在が推定されているギョ山東麓に接している。調査は南北約230mの細長い範囲に南・中・北の3ヶ所の調査区を設定して行なった。南区の北半部から北区北端にかけての南北180mの範囲には厚さ0.6～1.5mの整地土層がみとめられ、更に北方に連続するものと推察された。この大規模な整地事業は出土土器から7世紀第Ⅱ四半世紀頃に行なわれたものと推定され、その時期に関わる建物等の遺構は明確にしえなかったものの、舒明朝の「飛鳥岡本宮」あるいは斉明朝の「後飛鳥岡本宮」との関連が想定され興味深い。南区で検出した斜行溝SD01、井戸SE02からは重弧文軒平瓦、平瓦、銅滓、フイゴの羽口、土器などが出土し、また土壙SK03、SK04には銅滓を含む焼土が充満していた。しかし土壙の壁面は焼けておらず、近辺に炉跡の存在が予想される。これらの遺構はいずれも7世紀後半に属するが、出土した重弧文軒平瓦は50点をかぞえ、しかも大官大寺所用瓦ではないことから、調査地の付近に大官大寺より古い寺院あるいは瓦窯の存在が推定されるようになった。SD16、SD17はギョ山の山裾をめぐると思われる溝で、中世山城に関連する施設ではないかと考えられる。中区では掘立柱建物3、掘立柱塀4、溝2、土壙9などを検出した。遺構は中区中央を横切る東西溝を境にして北側に集中しており、これらの遺構の属する7世紀第Ⅳ四半世紀における地割区画の存在をうかがうことができる。

(岩本正二・井上和人)



遺構配置図

1980年度 飛鳥・藤原宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6AJB	藤原宮 第29次	80・4・2～3・31	3,000m ²	東面大垣
6AJB	藤原宮 第30次	80・7・15～81・1・13	1,193m ²	東方官衙
6AJK・WN	藤原京 第31次	80・12・1～81・3・31	1,200m ²	右京五条三坊
6AJB	藤原宮 第32次	81・1・26～81・4・30	1,170m ²	東面大垣東端地
6AJM	藤原京 第29—1次	80・3・17～5・1	480m ²	右京七条二坊
6AJF	藤原宮 第29—2次	80・4・15～4・16	50m ²	西方官衙
6AJG	藤原宮 第29—3次	80・5・14～5・23	100m ²	東方官衙
6AML	藤原京 第29—4次	80・6・30～7・5	75m ²	朱雀大路
6AJM	藤原京 第29—5次	80・7・30～10・9	675m ²	右京七条二坊
6AJH	藤原宮 第29—6次	80・9・25～9・30	200m ²	南面大垣
6AJH	藤原京 第29—7次	80・8・27～10・7	36m ²	六条大路
6AJG	藤原宮 第29—8次	80・8・19～8・22	3m ²	東方官衙
6AJG	藤原宮 第29—9次	80・8・19	12m ²	東方官衙
6AJF	藤原宮 第29—10次	80・8・18～8・25	50m ²	東方官衙
6AJF	藤原宮 第29—11次	80・8・18～8・19	28m ²	東方官衙
6AWG	藤原京 第29—12次	80・11・17～11・21	42m ²	左京八条三坊
6AMF	藤原京 第29—13次	80・7・16	3m ²	左京九条三坊
6AJG	藤原宮 第29—14次	80・12・12	6m ²	東方官衙
6AJG	藤原宮 第29—15次	80・12・2	11m ²	東方官衙
6AMF	藤原京 第29—16次	81・1・13	8m ²	左京八条四坊
6AJG	藤原京 第29—17次	81・1・19～1・21	72m ²	左京五条四坊
6AMH	藤原京 第29—18次	81・3・20	15m ²	左京十一条三坊
6AMF・MG	村道耳成線第1次	80・10・6～11・29	1,127m ²	左京九条・十条三坊
6AMN	田中宮推定地	80・6・6～6・10	40m ²	
6AMD	浄御原宮推定地	80・8・6～8・7	17m ²	
6AMD	浄御原宮推定地	80・12・8～12・25	125m ²	
5BST	坂田寺 第3次	80・4・8～4・28	100m ²	伽藍中樞部
5BST	坂田寺 第3—1次	80・4・10～4・12	12m ²	
5BST	坂田寺 第3—2次	80・5・7	10m ²	
5BOQ	奥山久米寺	80・5・28～5・29	15m ²	
5BOQ	奥山久米寺	81・3・4～3・6	3m ²	
6BTK	大官大寺 第7次	80・7・7～12・10	1,320m ²	寺域北限
6BHQ	檜隈寺 第2次	80・8・4～11・6	280m ²	金堂
5BAS	飛鳥寺	80・12・8～12・9	16m ²	寺域東方
5BAS	飛鳥寺	80・12・18～12・23	67m ²	寺域西方